沢瀉（おもだか）の紋章の影に

（昭和六〇年度放送文学賞受賞作）

（第四回）

吉田紗美子

四　砲声

一

ひさは足を止めた。

先月の墓参から一と月の間に、冬中は白茶けてくすんでみえたどの邸にも、きらめく春の陽光を浴びて樹々の緑が萠えだし、梅の紅もみえて、いきなり華やかな気配に変わってしまったのに、その一角だけは門を閉ざして異様な空気であった。

「あれは、どなたの……」

いいかけて、ひさは息をのんだ。

同道していた健が、

「江村彦之進どのの邸から二軒目、東東馬どののお邸じゃ」

と、両隣をたしかめていった。

紛れもなく、東東馬がお咎めをうけたのであった。ひさは信じられぬように、贅を凝らした庭に無心に咲く白梅の花をみあ

げた。表十二間入二十間の、さして広い邸でもない。もともと東家は五十石の馬廻役をつとめ、父の藤太は郡代や代官も任じられたがさして器量のある人物でもなく、それが東馬の代になってあれほども権勢を恣にしたのは、彼が経理に明るく、また長く大坂留守居役として御用達平野屋五兵衛からの借銀の才に長けていたからであった。

東どのが、父上の急死の原因ともなった、あの東どのが失脚なされた……、ひさは呆然としたが、急におもいついて二番丁へまわってみた。飯田蕃俊教授の邸も同様であった。向かいの邸の妻女が、

「昨夜、夜ふけて家財とともに城下外れに立ち退かれました御様子、私どもも朝まで一向に気付きませなんだようなことでございます。お邸は即刻没収とか、あの羽振りのよかった飯田様がと、お噂申していましたところであります」

と、声をひそめて語った。

そういえばここ数日、隣の富山邸にしきりと人の出入りがあったのは、このためだったのかしら、ひさはしばらく道の真中にたって思案していたが、思いきったように浅見家へとむかった。

手狭ながら浅見家は、門から式台まで流れるように箒目が刻まれている。その砂の上をひさはためらわずに進み、案内を乞うた。返事はすぐにはなかった。気が亢ぶっていたひさは、二度も、「あの、もうし」と、衝立の奥に声をかけた。

座敷にはそのとき、宗藩からの客を迎えていた。昨年暮れから、朝廷ご自身にも手兵があって然るべきという御親兵結成の案があり、発案した長州藩が各藩によびかけてみたところ、親朝廷派の諸藩が応じ、万石あたりにつき一人を各藩の費用もちでさしだすことになった。作州、因州、雲州、米沢、津、盛岡、備前、姫路、宇和島、久留米など、この諸藩の兵がそろえば二百三十人ほどの手勢ができる、と客は説明し、

「長州はつまり三十七人をさしだします。隊長は不肖この私でありまして、三月に入ればすぐにも上洛し禁門警護の任につきたく存じますが、それについて」

三十七人のうち、支藩も応分に引きうけていただきたく、徳山は四人、その人選は栄三郎に一任する、とのことであった。禁裏警護の者といえば各藩よりすぐった練達者を出すであろう、栄三郎はすぐに、槍は長男・安之丞、小太刀は朝倉練治を

おもいうかべたが、あとの二人を思案している最中であった。
はなに手招きされた栄三郎は、大股に玄関にいった。「これは、ひさどの」、おどろきながら招じ入れようとするのを身振りで断ったひさは、黒い瞳をまたたきもせず栄三郎にむけた。
「お伺いしたいことがございまして、早朝からご無礼ではございましたが」
「一向に構いませぬ、で」
「はい。東様、飯田様お咎めはまことでありましょうか、もうお沙汰が出たのでございましょうか」
「おお。そのことなれば、数日中にも公になりましょう」
「では、本当にもう決まったことなのでございますね」
栄三郎のうなずくのをみて、ひさは目を伏せた。口を利けば声が震え、いまにも涙がほとばしるような気がした。ひさは黙ったまま丁寧にお辞儀をすると、栄三郎の前から去った。
はなは呆気にとられていった。
「殿さまが参府からおもどりになって重役方のお役替えがあるのは、昔からのこと。それをなして、ひささまはあねえに息弾ませておいでで。私はまた京の次郎彦がどうしたかと、どきっといたしました」
安之丞を御親兵にさしだす光栄に上気していた栄三郎は、そのことだったのか、とはじめて気付いた。あれはもう何年になるか、相州撤兵を端緒として、児玉半九郎が富山源次郎や東東馬らの政府の腐敗を烈しく追及し、怒りのあまり倒れたのは。ひさにはあの秋の一日が昨日のように生きていて、真相を知ったひさはこの何年もの間、決して彼らを赦そうとしなかったにちがいない。
「なんと、気丈なものじゃのう」
栄三郎が吐息をもらすと、
「何かは知りませぬが、初めてわたくしどもへまいられたというのに、式台から来て、なかなか権柄な」

はなの声には皮肉があった。

二月二十五日、お沙汰は公になった。

飯田蕃俊　二百二十石のうち二十五石を減じ押隠居　近郊に蟄居

東東馬　近郊に蟄居

荘原　杉原両評定役　お咎めお役御免

だが、富山一代家老だけは、嵐のすぎるのを待つ獣のように早々と「病気ひきこもり」と称して、みずから門を閉ざし。難を逃れた。お咎めはなかった。徳山には彼に罪をあたえられるような彼以上の実力者はいなかったのである。

ひさはその日、赤飯をたき、健を仏間によぶと初めて半九郎の無念の死のいきさつを縷々と話してきかせた。

「御政事向きのことは誰しも藩をおもうてのことなれば、構えて遺恨を残すでない、と林の小父さまも申されました。他人の不幸を悦ぶのは、姉さまも本意ではありませぬ。けれどお父さまの御無念をおもうとき、姉さまはこうせずにいられませんでした」

健は、ひさの烈しい気性を見るような、思慮深い目をしてうなずいた。

もとは、「はて、今日はなんの紋日でしたか」としきりにいぶかしがったが、ひさは笑って取りあわず、

「当家の紋日とわたくしが決めました。今年は一陽来復の年、きっと、もっともっと、良いことがございますよ」

と、長く半九郎の仏前に手をあわせた。

するとその夜、ひそやかに格子戸をあけて蔵本の使丁が姿をあらわし、「奥方様には、来る三月三日の雛の日に、のぶさまに目通りおゆるしあそばされます」、黄金の鈴がたった一つ鳴ったような言葉を残すと、また足音もなく朧月の下を去っていった。「奥方様には目通りおゆるしあそばされます」、これまで徳山の家中の娘は、ひさも、お部屋様にお目見えしたのに、のぶは江戸からお帰りになった御正室に目通りゆるされるのである。黄金の鈴の音色はいつまでも余韻をひびかせるようにひさには聞こえ、幸せがこんなに不意にひそやかに訪れることが不思議におもえた。

当日、のぶを送りだしたときから、ひさは何一つ手につかなかった。加えて、ききつたえた浅見家をはじめ親類の誰彼からつぎつぎに祝がとどけられて、その応待に席の暖まるひまもなかった。そして夕刻、供をしていった松蔵のふれが聞こえたとき、ひさは急いで門の外まで迎えに出ていった。

正装したのぶが晩春の夕茜を浴びながら、飴色の土塀に挟まれた横本丁の道をこちらに歩いてくるところだった。鳩羽色の紋付は微妙な朱色に染まり、千羽鶴をいちめんに織りだした襦珍の丸帯は銀色に輝き、のぶが歩を移すたび、着物の裾の花叢から群鳥が翔びたつ風情にみえる。もとに似て面長のすらりとしたのぶは眩しいほど美しかったが、一歩ずつ歩を移すたび、その姿には夕陽を浴びて息づく花の精のような哀艶さが滲んでみえた。

皆にとり囲まれたのぶは茫と上気して、夕食に手をつけるでもなかった。「ほんとに、奥はなんと綺麗なのでしょう」と、溜め息をつくばかりである。

「それはもう、さっきから何度も聞きました。それで、ご挨拶に粗相はなかったの」

「老女の浦路さまが教えてくださった通りにしたの。私の腰折れを浦路さまが奥方さまにおわたしになると、『のぶと申すか』と、一言おっしゃって。お部屋様は私に、にっこりあそばして、そのお美しいこととゆうたら、人形が笑いかけたようでおもわず震えました」

広い座敷には緋毛氈がしかれ、ぼんぼりが雛段の人形や黒塗金蒔絵の調度を照らし、女中衆の着物や打掛やさまざまの華やかな色彩が波うち重なりあい、誰かが身動きする度、さやさやと衣擦れの音がして香料の香りがそこら中にひろがり、奥は絵よりももっと絢爛と眩いばかりだった……。

「まだ夢の中にいるような……、人目にふれぬ深窓のお方はなんてお美しいのでしょう」

健は聞きあきた、というふうに、のぶがいただいてきた定紋入りの干菓子に手をのばした。のぶは慌てて遮って、

「だめ。これは大事にとっておきたいの」

「置いとけば、黴が生えるだけじゃ」

「生えてもいいの。お前は男だから、衣裳や帯や簪の美しさや、女中衆の低いしずかな笑い声や、しとやかな立居振舞や、そんな美しい女の世界なんて、なんにもわからないのですよ。これは私の今日の思い出なのじゃ」

のぶはそう言って、潤んだ瞳で皆を見廻した。

姉妹が寝所にひきとったのは夜も更けてからであった。着物をたたんでいるひさをぼんやり目で追っていたのぶは、そのうち坐り直すと、「あねさま、ほんとにありがとう……」と、艶やかに結いあげた頭を下げた。

「今日ののぶさんはそれは綺麗でした。着物も帯も思いきって新調した甲斐がありましたよ」

「今日のことは一生忘れませぬ。もう、何も思い残すことはありませぬ」

「のぶさん、なにを。急に改まって」

「わたくし……いつもおもっています。塗りが剥げて古びてしまったから、もうお座敷にはおけぬと、納戸へ入れた用箪笥があったでしょ。わたくしもいつかあの用箪笥のようになってしまうのだ、と」

ひさは言葉を失った。婚期を逸して座敷や人前に出してもらえず、厨のあたりでうろうろする娘がどこの邸にもいるものだが、のぶはそこまで考えつめていたのか、とひさはおもわずのぶの肩を抱きしめていた。ひさの陰になってひっそり娘盛りをすごすのぶは、半九郎の死後、縁談はおろか目見えの沙汰もなかったのだった。夕茜の中に見たのぶの姿に、浮きたつ華やぎよりは心に泌みる哀切さを直感したのは、そんなおとなしいのぶの想いの反映だったのであろう。ひさは目を潤ませながら、「いいえ、いつかきっとのぶさんも幸せなお嫁入りをしますよ」と慰め、その言葉が現実になるように願って、その夜は姉妹ともそれぞれに眠れなかった。

そして、のぶの目見えは無事に終わったが、それからもなぜか児玉家には人の訪れが絶えず、折にふれて贈り物もある。

遠石の浜の漁師千吉は、それが三度目の、熊笹をしきつめた上に見事な鯛をのせた竹籠を松蔵にわたしながら、酒焼けした赤い鼻をひくひくさせて言った。

「なにかね、よう鯛を持ってけ、もってけといわれるが、この家にゃなんか、慶び事でもあるのかね」

「お前の知ったことではないが」、松蔵は歯を剥きだした立派な鯛の顔をみながら、きわめて不愛想にいった、「じつは、わしも知らんのじゃ」。

ひさにも皆目見当がつかない。そのうち、光井某という隠居が訪れ、半九郎遺愛の盆栽がいまは無惨に姿を崩しているのに涙をこぼさんばかりにして、携えてきた若楓の一鉢をさしだした。

「お父上は生前、この新種の楓にいたくご執心でありました。今日やっと手入れもゆきとどき、御目にかけられるようなものに成長いたしましたので」

湿った苔に埋もれた小さな名木は、小さな葉を気品高く風にそよがせている。「これはまた、ご丹精な」、感歎の声をあげたひさは、視線を返したとき、そこに贈り物の効果を上眼遣いに窺っている老人の表情に出あって、はっと思いあたった。半九郎が重役だったころ、じつにさりげなく巧みな口上とともに届けられる品は、みんな声を持っていた。なにとぞお役を、なにとぞ宜しく、と、呻かんばかりに誼みを迫っていたものであった。光井老人が去ったのち、ひさは首をかしげて浅緑の鉢をながめ、といって次郎彦はまだ無役の若者にすぎないのになにをよろしくというのであろうと考えたが、鉢に托された客の声はついに聞きとることはできなかった。

ひさは知らなかったが、児玉邸の外の世界は急速に動いていた。

三月末、館に召された江村彦之進は、「京師での御苦労と一月三日参内の節その向き心配候を以て」、目録千匹の御下賜にあずかり、別室にて御酒を頂戴する。

ほどなく藩主元蕃は、鳥羽家老、林芳雲、河田佳蔵ら十五名の供をしたがえ、宗家訪問に萩へと旅立つ。

宗家の招きによるこの旅では、供の者まですべて宗藩主に目通りゆるされ、宗家にもてなされること鄭重であった。

同様に、長府、清末、徳山の三支侯はもとより、これまで宗家と冷やかだった岩国侯・吉川監物まで招かれて萩を訪問し、国許にかえってきた夫人たちにも改めて目通りし、贈り物を呈する。こうして「宗支の情交を深め」、長州藩内の結束を強化しようとする。

元蕃が徳山にかえってすぐ、俗論佐幕の富山らが一掃され、尊王攘夷を掲げた新政府が誕生した。

本城清　代官

林芳雲　一代用人

若者たちの起用もあった。

児玉次郎彦　大目付

河田佳蔵　萩にとどまり萩在番役

井上唯一　宗藩先鋒隊出役

としてすぐに馬関へむかう。そして、

民政と君側、藩内監察、萩、馬関と、すべての要所に同志を配した新政府の実力者、江村彦之進は、飯田蕃俊教授が去ってはじめて三十二才になってようやく席を得、ひっそりと藩校の訓導役におさまった。

次郎彦の大目付就任は、藩内を愕ろかせずにはいなかった。年わずか二十三才、「世以テ異数トナス」と評されたほど、宗支通じて異例の人事であった。

熊谷志津美、梅地央（わたる）、谷速水（はやみ）ら反対派は、早速に声をあげた。

「あの厳之丞が大目付だと。そんな器か」

「たかが軽輩上りの攘夷かぶれ。御家老も御家老じゃ、こんな人事には断じて承服できん。石が浮いて木の葉が沈む世の中ではないか」

横本丁の邸が反感の声に包まれているそのころ、なにも知らぬ次郎彦は、久坂から托された貴人の供をして瀬戸内を下る船中にあった。貴人は鉛色に近いまで真白に化粧し、緋精好（せいごう）織の小袖に白精好織の袴といういでたちで、いやでも乗合いの耳目をそばだたせる。この十九才の若者が公卿仲間でも攘夷急尖鋒でしられる、中山大納言の息、忠光侍従であった。

「間もなく富海（とのみ）につきます、そこから萩までは歩いてお運びいただきます」、次郎彦は華奢な青公卿をじろりとみていった、

「わたしは足は速いほうですぞ」。
すると利かん気の公子は、なにを！　とばかり、きりりと次郎彦を睨みかえした。
「まろが疲れたら、そちが馬になれ」
攘夷督励のために邸を出奔して長州まで来るだけあって、この異装の若者もなかなかしたたかである。
沿岸の山容はもう山陽道のそれになっている。京は遠くなってしまった、湧然とした故郷へのなつかしさの中に、次郎彦の胸中にはそんな一抹の想いがあった。

二

文久三年、癸亥（きがい）とよばれるこの年は、春から雨につぐ雨の日々であった。蔵本の奥まった一室で書類に目を通す次郎彦は、暮れ方になって雨と知ると、ひそかに書類を油紙につつんで自宅へもちかえり、夜を徹して読む。長たる者がこうして「しゃもじで鍋の底まで掻きまわす」ように執務するのは異例のことであり、すぐに熊谷志津美や谷速水らの「さすが軽輩政府のやりそうなこと」「ざぶとんが大きすぎて坐ってもおれんのだろう」と嘲笑するのがきこえたが、次郎彦は意に介さなかった。
目付の調書は蔵本の奥ふかく保管され陽の目をみることはないが、一般に公表される漠然とした「お咎め」の一語の裏には、おどろくばかり綿密、詳細な調書があり、目付の監察のすさまじさを如実に物語っていた。ここ十年来の事件には一つの傾向があり、それまでの事件が、たとえば宗藩領と境を接した山地での盗伐、御用紙の楮苗をめぐる争い、港での専売品の抜け荷など、いわば生活上の単純な動機によるものであったのにひきかえ、近年では、安政三年に国広星治左衛門の酒御用達割りこみにかかわる熊谷主税の切腹を皮切りに、中村治郎の公金費消にいたるまで、扱われている事件はすべて汚職。次郎彦は人心の荒廃に背筋を寒くしながら、あらためてこの責任は長く行政を司った富山源次郎、東東馬、飯田蕃俊らの負うべきもの、と

おもわずにいられなかった。
綱紀を粛正し人心を刷新するに、新政府はおもいきった措置を要する。それはなにか。調書をよみ継いでゆく次郎彦の胸中には、この課題がたえず形を成しかけたり崩れたりしながら蟠っていた。
その日の夕方、帰宅してみると式台のそばに番傘がたてかけてあった。迎えにでたひさが、彦之進の待っているのを告げた。
彼が座敷に通るとすぐ、彦之進が問うた。
「東東馬の件の審理はまだか」
次郎彦は机の周囲から床の間まで積みあげた覚え書を目で示しながら、
「大坂での蓄妾、藩紙の横流し、それに、室津沖で難破したと報告された御用船廻洋丸の積荷や廃材の着服など、東馬の当面の罪状には事欠きませんが、問題は、ここ十年来の汚職と東馬の繋がりを摘発することにあり、そこから着手しなければ無意味となります」
「では、早急のことにはならぬか」
「とても！」
「うむ。で、富山の方はどうじゃ」
「さて。あの老人の名は一切、書面の上では浮かんできておりませぬ」
それをきくと彦之進は吐息をもらした。冴えない表情である。やがて煩わしげに重い口を開いて語るところによると、
彼は今日、館に召された。
殿が御帰邑になると、それまで勤めた三家老は、一応、進退伺いを呈する。これは恒例であって、殿に異存なければその職にとどまる。この度も彼らは進退伺いをだした、だがそのあと新政府の当職をひきうける者がいない。日和見の彼らにとって、攘夷討幕を掲げた急進的な政府の最高責任者になるなど、およそ迷惑なことである。新政府としては当職はぜひにも必要であり、彦之進がその人選に頭を悩ましていた折も折、今日、殿はしごく無造作に仰せられた、「富山を召しだせば、どうじゃな」と。

途中から口を挟みたげに瞳を鋭くしてきいていた次郎彦は、そこで、息をのんだ。
「富山ですと。あの……俗論佐幕の元凶である富山老人が新政府の当職……。あの老人の政府をやっと倒したわれわれが、富山を頭に戴く、それこそ滑稽ではありませぬか」
「そうじゃ。だが殿が口になされた以上、富山は明日にも当職に返り咲き、新政府は、牛面人身の奇ッ怪な姿になるだろう」
新政府は富山らの息のかかった下僚のはしばしまで一掃した。従来の政変では重役の更迭はあっても下僚にまで及ぶことはなく、そのため、前例のない苛烈な人事を行ったと悪評を蒙むっており、林芳雲はその影響を案じている。そこへ富山を当職にすえるとなれば、新政府の人事は根本から矛盾する。次郎彦はこのなりゆきの原因を考えた末、あのお部屋様が恩のある富山のために、小さな玉虫色の唇でそっと殿に耳打ちしたのだ、と事情が読めてきた。
「その話、なんとかして叩き潰さねば」
「すでに殿は口になされた、それをなんで叩き潰せるのだ、石でか、金槌でか」
「本城どののご意見は」
「おそらく妙手はあるまい。兄上にとっては、殿のご意向は千鈞の意味」
「富山の出方は」
「そこじゃ。引き受けられては迷惑、辞退されても新政府は立往生する」
彦之進は腕組みしていたのち、「もう、よい。富山の罪状が出れば打つ手もあったが。これも成りゆきだろう」と、放りだすように呟いた。こんなときの、犀利な頭脳をもった、見えすぎる眼をもつ彦之進は、次郎彦にとっては不可解であった。
十月の参内が流れたときも彼は、「参内は女の響のごときもの」と冷然としていた。たしかに勤王の志からすれば参内は飾り物にすぎなかったが、この度の問題はたんに殿のご意向は千鈞の重味で片付くことではなく、新政府にとっては、活殺を賭けた象徴的な意味をもつ重大事ではないか。自分は執するたちであり、脂汗を流しなりふり構わず土壇場でまだ諦めぬ、なんとか打開する手はないものか……、黙りこんだ次郎彦の耳に、急にはげしくなった雨音のみがきこえた。

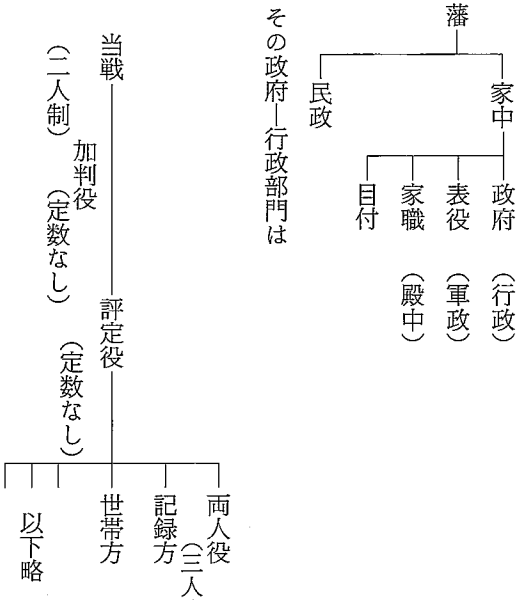
襖が開いた。ひさは二人の気配に余分の言葉もなく茶をさしだし、行灯に火をいれた。退りしな、書き損じの紙を拾ってちらと次郎彦を見、次郎彦が「要らぬ」と首をふると、ひさは袂に入れてしずかに退っていった。天啓のように彼の胸中で一つの考えが像を結んだのは、そのあとであった。一日も早く東馬の件をすませ、大坂に借銀に赴いてもらいたい、との彦之進の言葉がすむのを待って、彼は「さきほどの当職の件でありますが」と、話を元にひきもどした。

「新政府にとって、当職はぜひにも必要でありましょうか」

おぬし、狂ったか、といいたげに、彦之進は無言でその特徴のある凝視を注いできた。

次郎彦は膝をすすめた

徳山藩の職制は、宗藩に似せて、四つの部門に大別されている。



その政府—行政部門は

評定役の下に、両人役を含む十五の部門がある。
下部からの報告や意見は、両人役、評定役の合議を経たのち、当職がその可否を定め（重要事項は加判役の協議も得て）、殿の裁決を仰ぐ。
だが通常の庶務はそれでよいとしても、と次郎彦はいった。七十五石以上の士には意見具申の道がひらかれているのに、かつて下部の声が殿に届いたためしがない、この職制の長い階段を通るうちに、新しい意見はいつか事勿れ主義、現状維持の重役たちに揉み消される。なるほど宗藩のような大世帯では、この職制は必要だが、小藩の徳山では不用、むしろ有害ではないか。
「頭が大きすぎては転ぶだけです。以前には、当職と評定役の間にさらに、手元役、密用役などの重役職があった。だが、それらを廃したところで一向支障はなかった、なぜなれば、それらは皆、人の為に設けられた官であったからです。廃したのはなぜか、嘉永年間に児玉半九郎が手元役を廃止したのは、そこに権力が集中増大し、弊害を生じたためでありました。現在では評定役がそれ、東東馬の専横も職制そのものの罪といえる。歴史をさかのぼってみると、過去には、当職を補佐し枢機に参与する両人役にもっと権限がありました」
彦之進の瞳に強い光りがはしった。
「新政府は人材の登用を謳った。実際に有能な下部の者に意見具申の機会をあたえ、かつ、その声が殿の耳に届くようにしてこそ、士気を鼓舞し綱紀の粛正もできる。そのためにも、殿には近いほうがよいのです」
「厳之丞、すると、おぬしのいいたいところは……」
「そうです」
次郎彦は上体を真直に立ててうなずいた。
「この職制は長い年月かけて練りあげられたものだが、現在の時勢では再考を要する。極論すれば当職も評定役も不用のもの、まして火鉢に手をかざしているだけの決断力のない当職など、なんの役に立ちましょうか。昔に復し、責任は両人役の合

議で取ればよい。げんに京では、われわれは直接、殿に進言し殿も耳をかしてくだされた。宗藩では人材が輩出するのに徳山ではなぜそれがむずかしいのかと考え、結論として、萩の大殿は若い者の意見を用いられるのに反し、ここの殿はまず重役の意見をきかれるからだと、皆いったではありませぬか。そしてわれわれは富山らの政府を倒し、門閥や地位に左右されず、殿と膝を交えて語れる政治を、と願ったではありませぬか」

彦之進は、しばらく無言であった。

やがて、居住いを正した。

「厳之丞……いや、わたしは今後、厳之丞と呼ぶことはないであろう。筆と紙を」

彦之進はそう言って、さらさらと書いた。

贈　児玉次郎彦君

青田好男子　一見即欣然

強記貫千古　妙齢纔廿年

退蔵非敢後　直往自無前

不惜潜夫論　為君聊欲傳

「それは、京以来の感想じゃ」と、次郎彦が読みくだすのを待って、彦之進は恍然と笑った。その生涯に「心から笑う」ことは二度か、あるいは三度あったか、彦之進の笑顔は手垢に塗れず純粋そのものであった。

「項羽字長胴子」、当時、志士の間で流行していたその詩句をふまえ、冒頭から、青田（次郎彦の号である）はまことに男の中の男、行動きわめて明白、君こそは王符記すところの「潜夫論」を実践する者、との過褒の讃詞である。式台のあたりで、やがて、ぱちっと番傘の止め金が鳴った。帰ってゆく彦之進の傘を、滝飛沫のような雨が叩いている。弾きころがる雨粒の一つ一つの音は、詩を前にしている次郎彦に爽快な陶酔をもたらした。

彦之進の起草した一万二千字におよぶ大改革案が公表されたのは、それから半月のち。この改革案は従来のものとことなり

半ば無期限に適用される。

「それ故あまり厳に法を立て候ては情を洩らし欲を養い、出来ることも出来不申候故、少々寛やかに」心掛けたとしながらも、彼は冒頭に、「君公並びに諸役人皆この令の通りに向かい、よろしきと思い、行い申す時は法は行われ候也。往年の改革のごとき、倹約を唱え自らは奢りを極めては法は立ち不申、それ故役人法を犯す者は罪を厳に、小人は恕し申すべくなり」と、とくに高官と役人の姿勢をただし、ついで準戦時ともいうべき情勢にふれて人心の刷新といっそうの節倹をよびかけた。

贈り物にはとくに一章を割いて汚職の悪風を戒めた。諸儀式、家中往来は簡素化し、居宅、道中、衣服なども細かに質素倹約を規定した。芝居見物、物見遊山など論外のこと、あらゆる冗費を削って、沿岸防備と討幕への軍備に廻すのである。この年、藩の積立金は千三十五両と別途に七十五両余、ほかに、正月の藩主参内を祝って領内から献納されたわずかな金があるばかりだった。

当然のこととして屋鋪御用酒をのぞき、酒手形はこの年かぎりで廃止、御用達十家へはそれぞれ実績に応じた割りあて制を採用することとし、これまで御用達仲間で紛争のたえなかった国広屋治左衛門の割りこみを一気に斬りすててしまった。

新政府は、下部にも具申の道をひらくなどつぎつぎに行政に新風を送ったが、好意的な目で見守っていた宗藩が瞠目したのは、次のような布告であった。

「都合ニヨリ当職、評定役コレヲ廃ス」

けれども両人役合議制は対外的には不便が多く、彦之進は必要にかられるまま、会計局長、海防局長、硝石製造方局長を兼任し、いつか、代官として民政をつかさどる兄、本城清とともに、徳山藩の実質的な代表者となった。

三

朝廷仰せだされの攘夷期限は、五月十日。

ひさが盆にのせてきた井上唯一の手紙によれば、馬関での攘夷は大いに意気揚っているとあった。十日のその日には、退去勧告を無視して碇泊したアメリカ商船ペングローグ号を撃ち攘い、今日二十三日にはフランス軍艦キエンシャン号と砲火を交えて撃退した、とぶっきらぼうだが緊張感にみちていた。

いずれ、この徳山沿岸にも台場を築かなくてはならなかった。次郎彦はひさにいった。

「今夜、馬関にむけて発つ」

「はい、いつなりと。お支度は調えてありますゆえ」

「うん、そうであったな。松蔵を遠石にやって、千吉に船の支度をしておくようつたえさせろ。それと、あとでこれを、江村どのの邸に届けておくように」

次郎彦は振りむきもせず、巨きな背中をみせて矢継ぎ早やに命じた。そしてその背中はひさが命令をてきぱきこなすのを当然、と信頼しているかのようであった。ひさは彼の帰国以来、妻というよりは有能な用人に近い存在であったが、ひさはそれが決して厭ではなかった。男がお役につけば責任と自覚がこれほども人を輝かすものか、松蔵を供に、蔵本へ出かける次郎彦は威厳がそなわり、精悍そのものにみえた。かつて、半九郎の出仕姿は端然と見事で、ひさは娘心に「お父さまはご立派だ」と見惚れたものであったが、もうその姿は薄れがちになって、「お父さまもお立派だった」と思い返すこのごろである。のぶは「兄さまは京ぐらしで人間が一廻り大きくなられた」といった。ひさもそうおもう。けれども、時にひさを眺める瞳に以前になかった深い優しさをみるにつけ、寝所でそれを実感するにつけ、次郎彦を大きくみせているのは感情のゆたかさではないか、とおもえてならなかった。

松蔵が着替えの世話をして、次郎彦は夜に旅立ち。馬関に到着したのは、二十六日の暁である。艀を利用して海上からまっすぐ、唯一のいる新地（しんち）の宗藩先鋒隊の本営をめざす。

海上から望むと、沿岸の崖をくずし、石を運び、三千の役夫たちが蟻の行列のようにつらなって砲台作りを急いでいる。砲

台は、断崖上でなく、中腹に築く様子。宗藩が招聘した長崎の砲家、中島名左衛門の設計によれば、この沿岸十三ヵ所に砲台が完成したときはじめて海峡封鎖は万全なものとなるはずであったが、雨に禍されて工事は捗っていないようであった。

船頭もいった。

「馬関の町の者も総出で、炊きだしや篭かつぎを買うて出ておりますが、なんせ、この雨続きでありますけえのう」

「ご苦労なことである」

「なんの、中山侍従様でさえ、はだしになって篭をかつがれるんじゃけえ、わしらにゃ当り前のことであります」

「おお、中山侍従も来ておられるか」

思いがけぬところで侍従の名を耳にした次郎彦は、あの利かん気の青公卿ならやりそうなこと、と微笑して、富海港についた日のことを記憶に甦らせた。

その朝も土砂降りの雨だった。出迎えも到着していず、萩まで歩かせるつもりだった次郎彦もさすがに気の毒におもえて、舟番所に馬を交渉してみたが、「どなたでありましょうとも今は戦時、余分の馬などありませぬ。萩までは近い。歩かれませえ」の一点張りであった。やむなく山口街道へと歩きだしたものの、侍従は頑として、蓑笠などは用いぬ、と言い張る。小者のさしかける傘の下で、たちまち化粧は剥げてまんだら、小袖はずぶ濡れ、しかも分岐点の宮市からは、馬関へむかう先鋒隊の隊列や糧秣をつんだ駄馬の列とすれちがって泥ばねのかかり放題で、水からひきあげた雛人形さながらの哀れな姿となったが、それでも侍従は昂然と面をあげて歩いていたものであった。

その侍従はいま、光明寺の屯所にいる、という。攘夷期限をひかえて京から馬関に急行してきた久坂玄瑞は、先鋒隊に加わることのできない身分の低い士を糾合して、「光明寺党」として、侍従を頭にいただいた。それを聞きつたえた九州諸藩の脱藩者で「光明寺党」は日に日にふくれあがり、今は攘夷の主戦力になっている。あとで光明寺屯所に寄ってみるか、と次郎彦が考えたとき、梅雨曇りの厚い雲の彼方で一発の空砲がとどろいた。

船頭はにわかに舟の向きをかえ、手近の舟着場をめざした。みると、海上に散らばっていた漁船もいっせいに舳を返してい

る。

「外国船がくるであります」

「では、今のが合図なのか」

「はい。あれは彦島砲台の合図、外国船は玄界灘のほうから海峡めざして東に進んでくるであります」

話すうちにも合図の砲声はつぎつぎに送られ、頭上の亀山砲台から赤間ヵ関、壇浦、杉谷、長府と、東に移ってゆく。

次郎彦は亀山神社下の波止場にあがった。みると周囲には、どこから湧いてでたのか、揃いの紺色木綿の胴着を着こんだ先鋒隊の兵士で埋まり、彼らはいっとき青い渦巻のように右往左往するかにみえたが、やがて整然とした流れになって持ち場へと走りだした。彼らの具足の汗臭いとも黴臭いともしれぬ異臭のなか、次郎彦も流れに揉まれてついて走った。道は上りとなり、径となり、雑木林をぬけたとたん眺望がひらけた。

そこは、亀山神社の楼閣を真下にみおろす亀山砲台。海峡の中心に位置するこの要衝からは、馬蹄形に弯曲した馬関海峡が、対岸の小笠原領が、その間をながれる潮の流跡が、手にとるように見渡せる。潮はいま干潮。瀬戸内から寄せてくる潮は、狭いじょうごの口に注ぐように流れこみ、あちこちで小さく渦を巻きかえしながら玄界灘の方へと奔流してゆく。

雲が切れた。陽が輝いた。鉛色の海面がひとところ陽を弾いた。西寄りの入江では、宗藩の軍艦、庚申丸と癸亥丸とが帆を張って待機している。癸亥丸は十二枚帆の洋式帆船で、その艦橋には遠目にも色あざやかな赤い小袖の人物がみえる。それが中山侍従だとすれば、まわりの一団のなかには久坂もいるはずであった。

亀山砲台の装備は、十八斤長カノン四門。照準をあわす者、後方の弾薬庫から弾をはこぶ者と忙しく動くあいだにも、遠くから海鳴りのような響きが大気を震わせてきた。そばで、鉢巻きをしめ袴の股立ちをとっただけの平服の少年兵士が、お祭り騒ぎでもはじまるかのように燥いでいった。

「さあ、くるぞ、くるぞ。今日のは、獲物にとって不足はないんだ」

次郎彦はたった一つ知っているオランダ語を駆使してたずねた。

「どんなストンボッチ（スチームボート）じゃ」
すると相手は事もなげに、
「バトルシップだよ。しかも、オランダ東洋艦隊の最新鋭艦、メデューサ号だ」
「メヅーサか」
「メデューサ。パタビアの新聞をみてるから、奴がくることはわかってた。ほんとはおれ、海軍なんだ。癸亥丸の砲手長だが、あいにく上陸中だったもんで、ここで加勢することにしたんだ」
少年が江戸弁で、癸亥丸は攘夷期限ぎりぎりの十日に江戸邸の武器弾薬を満載して馬関にやってきた、と説明するうちにも、海鳴りはしだいに大きく近付き、やがてハッキリした機械音に変わってきた。彦島砲台に加えて細江（ほそえ）、専念寺（せんねんじ）の各砲台があらたに火蓋を切ったが、その砲声を掻き消し車輪の音は轟々と近づいてくる。
そして、岬を廻ったメデューサ号が長いバウスプリットの先からようやくその全容を現わしたとき、次郎彦は呆然として視界いっぱいに拡がる漆黒の怪物をみつめた。これこそ、黒船。圧倒的な重量感をもつ鉄の砦。全長、百八十フィート。艦長カッセンフロート以下、士官五十九、乗組総数二百二十一。三本マスト、艦首のバウスプリットは庚申や癸亥を二つ並べて串刺しにできるほども長く、両舷には十六門の大砲、それが黒煙を吐き耳も聾する車輪の回転音をひびかせながら、この逆潮の急流をものともせず悠々と巨体を進めてくる。
癸亥と庚申は攻撃に移った。次郎彦の目には、二隻の木造帆船は鉄の砦に戯れる二羽の胡蝶ほどにみえた。少年は射程内に入るメデューサを待っていてから、「打てっ」とどなった。四門の青銅砲が火を噴いた。メデューサの左舷に水柱があがった。吃水に命中したのもある。が、メデューサはびくともしなかった。癸亥が帆を孕ませて進路を遮った。それを援護するため、「続けて発射っ」、と少年は声を枯らしてどなった。
対岸の小笠原藩はこの戦闘を目前にしながら沈黙を守っている。小高い山の上で握り飯なんぞ食べながら高見の見物をしている者もいる。幕臣である小笠原藩はもともと攘夷する気など毛頭なかったのである。とみたメデューサは艦をぐっと小笠原

領寄りによせて航行し、やおら左舷の八門をぴたりとこの砲台にむけた。……火花が走った、とみるまに、シャーッ、バリバリバリッ、海と空を力任せに引き裂く名状しがたい砲音がおこった。土煙が収まってからみると、目下にあった神社の楼閣は跡形もなく消え失せ、馬関の町に土煙が濛々と舞っていた。台場後方の雑木林も一部が薙いだように裸になっている。また斉射。着弾するごと地震のような震動が大地をゆりうごかす。予想をはるかにこえた敵の砲の射程の長さ、爆発力の強大さに、肉体的な恐怖が次郎彦に襲いかかってきた。

「ばかやろうっ。打つんだ、弾をこめろ、狙え、打てっ」

次郎彦とともに草に伏せて土気色の顔をしていた兵士たちは、少年兵の甲高い叱咤に我にかえり、大砲のそばに駆けよった。

もうそれからは聴覚はなんの役にも立たなかった。赤間ヵ関、壇浦の砲台も火蓋を切って、彼我の砲声と震動で空も地も沸きかえった。海峡は黒煙に閉され、煙の切れ目にちらりとみえる光景だけが、奇妙なほど視覚に烙きついた。味方の砲弾は信じられないほど命中していた。吃水に五ヵ所、煙突に三発、メインマストに一発。

たかを括って突破しようとしていた艦長カッセンフロートは、そのころになってようやく抵抗の烈しさに狼狽し、やにわに艦首を左八点に振った。邪魔な庚申と癸亥の間を突破し、一気に二隻を轟沈させようとする作戦である。ぐいぐい距離をつめたが二隻も一歩も退かず射つ。メデューサのボートが空中に舞った。庚申はマストを折った。メデューサの艦首の掌砲にしがみついていた金髪の士官が上衣の裾をひるがえして海中に落ちた、同時に、癸亥のメインセールが甲板に落ち赤い小袖がみえなくなった。すでに彼我の距離は四丁たらず、さらにそれをつめ、もう衝突は目前であった。

だが、そこで、メデューサ号は急に動きをとめた。

わあっ、台場をゆるがす歓声があがった。

「あそこに海鼠(なまこ)の形をした暗礁があって、敵はみなあれに掴まっちまうんだ。さあ、仕留めるのは今だぞっ」

少年のいう通り、メデューサは進みも退きも不能になっていた。罠にはまった大きな獣さながらのメデューサは、各砲台からの十字砲火にさらされ、左舷の艦砲を熾烈に打ちながら、汽缶もやけるほど黒煙を噴きあげ、右八点に方向転換して退避に

全力をあげる。

ようやく脱出に成功したのはそれから半刻たったころであったがすでに満身創痍、そのうえ東へ航行をはじめたとたん、それまで沈黙を守っていた前田砲台八十ポンド砲十数門の斉射をうけ、さすが巨体のメデューサも艦首がぐらりと傾くほどの被弾であった。

正午まえ。

沿岸を無差別に砲撃しつつ、メデューサ号は東の海上に点と化した。

少年兵は煙硝で煤けた顔に白い歯をみせ、

「今日は愉快だった。あのメデューサに十七発も報いてやったんだ。陸兵もたのもしくなったもんだ」

と、先に立ってすたすたと台場をおりていった。宗藩では、フィートだのバウスプリットだのと異人種の言葉を日常茶飯に操る新しい集団が生まれている、それを感じながら次郎彦は勇敢な少年にわかれ、新地の本営めざして歩いていった。

戦勝の日は酒が支給される。ごった返す本営のなかで唯一と再会した次郎彦は、あらためて近くの小料理屋で祝盃をあげた。町民の女小供ははやく疎開し、給仕するのは花街の妓たちである。真赤なしごきを襷にした妓たちの肩ごしに、誰もが紅潮した顔でメデューサ撃退をどなりあっている。その大声が遠くにぼやけたり、またふいに近々ときこえたりする。次郎彦の鼓膜はまだ痺れ、あたまの中ではメデューサの形容しがたい砲声が鳴っていた。これが、「攘夷」であった。京で論じられた攘夷はおよそ空疎で観念的な思想でしかなかった。夷を撃ち攘う、なんかではなく「戦」そのもの、真の攘夷とはあの鉄の砦と砲声の示す単純で途方もない事実に他ならない。

唯一は上機嫌であったが、次郎彦はその顔に重なって胡蝶ほどかよわげだった二隻の帆船の姿がみえて仕方がなかった。長州の海軍力といえば、あの二隻のほか虎の子の甲鉄艦・壬戌丸（にんじゅう）を擁するのみ、「沿岸に櫛比する砲台と巨砲、進んで敵を迎えうつ艦隊なくば、赤子が素手で戦を挑むにおなじ……」、いみじくも兼崎昌司はかつて言った。列強の海軍を向こうにまわして長州は大変なことを始めてしまった、急がなくてはならぬ、とにかく金だ、金がいる、次郎彦は突風に煽られるように、あ

のメデューサと木造帆船の差を遮二無二縮めなければ長州は、いや日本は、戦慄すべき結果になる、と実感していた。
陽焦けして逞しくなった唯一は「攘夷は性に合っている。徳山へかえって新政府の小役人になってもつまらん。おれは当分、久坂と行を共にする」と話しながら、廊下の向こうをゆく女将らしい女を目で示した。
「みたか」
「うん」
「なんだ、思いださんのか」
そのさんだ、と唯一はいった。
次郎彦は腰を浮かせてその姿を追ったが、その女将そのであるはずはなかった。
「ほら、いま兼崎昌司の邸になっている、お弓丁西から数えて三番邸、熊谷主税のところにおそろしく気儘な娘がいただろう、何度も養子をかえた……」
「おう、あの切腹した納戸役……」
次郎彦が思いあたって見直すと、髪形、身装、そのはどこからみても水商売が身についていた。禄を召しあげられた侍の娘にあれからどんな変転があったのか、今はともかく幸せに暮らしているらしかった。
久坂に会ってゆけと唯一はしきりにすすめたが、次郎彦にはもう砲台視察はどうでもよく、一刻も早く銀策に上阪せねばならなかった。彦之進は三万両というかつてない額を予定している。次郎彦は双肩にずっしりした三万両の重味を切実に感じた。

四

「急ぐことはありませぬ」

軍師格の谷城老人は落ちつきはらっていった。御用達平野屋の番頭、篤兵衛はほかの席からまわってくるので「天松」へは約束の刻限よりおくれてくる、もし早く来ても待たせてやればよい、というのである。

だが、ここ浪速の地は商人の支配する所、ここでは侍のほうから御用達に年賀におもむくのをはじめ、御用船の入るたび国許の物産を貢ぎ、四季折々にもてなす際は留守居役が幇間さえつとめる習いであってみれば、茶屋に出向く時刻にいささかの意地を張ってみても無駄だと、次郎彦は口に出した。

「先に行って篤兵衛を待つ形になっても、わたしはすこしも構わぬが」

「なりませぬ」、谷城老人は以てのほか気色で、

「ただの一度たりともそんな不見識をなされば向こうは図にのり、それが今後の例となってしまいます。なにとぞ日が落ちてから」

と、新規の大坂留守居役に代ったのを機に、すこしでも御用達の傲慢さを抑えようとする口吻である。

次郎彦の借銀予定額は、

平野屋に　三万両

ほかに小口として、

雑喉屋に　銭三百貫

銭屋に　銭二百貫

七月はじめ着坂。ただちにこの土佐堀の蔵邸に三家を個別にまねき、顔合わせと手土産の贈答をすませ、借銀申し入れの文書を手渡したが、この半月間は埒もない「前例」と「格式」に終始し、今夜いよいよ第一歩をふみだす。

次郎彦は縁側に立って晩夏の茜空をみた。幻の城がみえる。平野屋。創立以来の徳山藩を今日まで在らしめた蔭の功労者、用人待遇をもって遇されるこの御用達は、同時にまた、片方の手で容赦なく藩財政を圧迫する収奪者でもある。代々、五兵衛を襲名する大坂御用達きっての名家。一日の商い高は万石大名を凌ぎ、下は丁稚小僧から上は別家分家にいたるまで「平野屋

一統」と誇る数百名の組織はすでに立派な一つの城といっていい。この堅固な城の門を東馬はどんな手段で開かせてきたのだろうか。

昨夜、番頭篤兵衛は谷城老人に借銀申し入れの文書をかえして、「この話はなかったことにしていただきたい」といった、という。

理由はまたしても「前例」にあった。

およそ借銀に際しては、家老じきじき下役二人を同道して上坂し銀談する例であるのに、今回は重役もこず、留守居役が江村両人役の添え状持参で借銀するというのでは、店として責任の所在に合点がゆかぬ、それに銀高莫大でもあり、店でも手に余る。

「と、こう述べたてましてな。平野屋側では、従来より扱いを粗略にした、とへそを曲げました」

「む。私の資格も問うた、わけですな」

「そうも申せましょう。児玉様はどんなお方かとくどくどたずねておりましたし、また当職の添え状のないのを問題にしておりましたが、私には国許の詳しい事情はわからず、明夕あらためて児玉様じきじきお会いなされると申し、ともかく書面だけは突き返してきた次第であります」

当職の添え状がない……、老人が退ったのち、次郎彦は森閑とした蔵邸のなかでよっぴて、邸裏をながれる土佐堀川のぴたぴたと重い川音を聞きながら、対策を考えた。

当職、評定役切りすての措置は、富山源次郎を当職にいただくかどうかの瀬戸際になって、新政府がその存立を賭けて打った「奇手」でもあった。それが、この場にいたって火を噴いてきたのである。これほど前例と格式を重んじる平野屋にしてみれば、当職のいない政府を信用できぬのは当然、当職どころか重役さえ一人もいず、両人役五名の合議制で運営されていると知れば卒倒しかねない。いま天下の三百諸藩でこうした行政形態をもつ藩が他にない以上、平野屋はこの新味を解しえず、どこまでも当職不在の原因を追求するであろう。次郎彦の怖れたのは、新政府が弱体と見抜けば金は貸すまい、というそのこと

である。

この瀬、どう乗りきるか。

今となっても妙案は浮かばない。やがて、ただならぬ赤さの陽が落ちた。次郎彦は井戸傍へゆき水を浴びた。生ぬるい、かすかに塩分のまじる水である。

「あ、あたま冷やしてゆかはりまっか」

通りすがりの下役がにやにやとした。

ふわ、ふわ、と蔓の煙ほど捉え所のない語尾不明瞭の大坂訛りだが、国許言葉にどう訳しようもないほど愚弄が泌みこんでいるのだけは、次郎彦に理解された。

着坂した日から、蔵邸中の下役が敵であった。留守居役の交代にあたって邸中の畳、建具を新しくして新任者を迎えるのが慣例であったが、節約第一の徳山から来た次郎彦の目には、それは〆て一貫目の銭の冗費としかみえず、「無駄なことをする」、と口に出した。すると翌日から、谷城老人を除くすべての下役が「病気」と称して三日も出仕しなかった。

次郎彦は立腹した。「今回の上坂の目的は借銀のほか、東東馬の汚職の調査にある。身に疚しくない者はただちに出仕せよ」、きびしく通達して皆はしぶしぶ顔を揃えたが、「えげつない言いようやないか。そっちがそうなら、こっちかて何一つ教せてやるかいな。あほらしうもない、ぽっと出の若僧に三万両もの話、でけるおもてんのか」、わやわや聞こえよがしに言って執務しない。終日、鼻毛抜きつつ食味と女体の話、馬関での攘夷もどこ吹く風で、蔵邸の空気は腐りきっている。長年、東馬の下で旨い汁を吸ってきた彼らは、「なあに、一寸の間、隠居してすますさ」と笑いながら帰国した東馬がいずれ戻って来ると信じ、また、そう望んでいる。

そして、通常、借銀には双方の根廻しを買って出る「仲介人」が群がってくるが、次郎彦は彼らも排除したので文字通り、たのみとするのは谷城老人ただ一人、という有様であった。

井戸傍には、萩が赤い米粒ほどの花を咲かせていた。もう秋、国許の米の収穫量は平年を上廻ったかどうか。藩会計が米と

銀の二本立てで、御用達への利払いも米と銀に頼る以上、物資騰貴による米価の上昇は歓迎すべきであったが、反面、銀はじりじりと価値を失いつつある。契約期はおくれるほど不利、一日も早く埒をあけねばならぬ、と、あながち若さの故ばかりでなく、次郎彦の内部でしきりに彼を急がす想いがあった。

次郎彦と谷城老人は、蔵邸を出た。堂島川をわたれば、曽根崎新地。「天松」は、軒をならべる茶屋のなかでも一際大きい。どの座敷も、おなじような御用達と留守居役で満席であった。でっぷり脂ぎった篤兵衛は、縞の単衣に大坂商人の駆けひきを包み、供の者と二人、満足気に芸者にかこまれて、

「この節はどこ様も外席は嫌いはって、なかなか、こない結構なお座敷にはよんでいただけまへん。それが徳山様にだけは、東様から気前ようお招きにあずかりました」

「そうか。国許ではこの春から倹約一途の方針で、もう東どののようにはゆかぬ」

「それがよろしま。わてもあんまり再々やよって、ちょっとお引き締めになった方がええ、おもてたぐらいだした」

先夜も交渉の長びいている因州藩の留守居役と道頓堀で席をもち、表へ出たとたん、国許から上坂してきた若侍たちに襲われて留守居役が手傷を負うと言う事件がおきたが、

「それが、お気の毒ともなんとも、わてと間違われはったんでおます。手前もとんだ敵役で、ご馳走になりますのんも命がけだす」

む、これは厭味かと黙っていると、篤兵衛は煙管をはたいて、さらに、

「おなじ徳山様でも、春までの京お留守居様には、一度しかお招きいただけまへんでした。お帖面をみればお分かりやと思いまっけど、大方、手前どもがお気に入らなんだのだっしゃろ」

鼻から煙をふきだして次郎彦をみた。

春までの京留守居とは。ほかならぬ次郎彦自身で、金繰りなんぞと下役任せにしていた仇をこんなところで取られようとは……、彼は襟首を掴まれた気がしたが、外見は悠然として、やおら委任権の問題に入っていった。

「昨夜の趣は、この老人からしかと承ったが、つまり今回の銀談は重役も上らず扱いを粗略にした、と勘違いしているようじゃな」

「いえ、徳山さまは慶安二年以来、二百年のお出入りだすよって、ゆめにもお店への扱いを粗略になさるとはおもてまへん、ただ」

と、篤兵衛はゆったり眼尻に微笑を刻んだ。

「平野屋は、大坂御用達のなかでもことにのれんが古うおますよって、古風で固い商いをいたします。いわば、何事も前例通り、にだす」

家老が肩衣着用で（それも木綿のではいけぬ、絹でときまっている）恭々しく罷りでれば話にのろう、との穏やかできっぱりした拒絶であった。

次郎彦は鷹のような鋭どい瞳を篤兵衛の微笑から放さず、芸者が矢継ぎ早やにみたす盃を干した。いくらでも飲む。ついに篤兵衛が目を丸くしたころ、「その前例について説明する」と、ふうっと息をついた。

銀談に際し家老が上坂する「前例」はないのであって、先年の台風禍による借銀の折は飯田蕃俊評定役が上坂したのであり、昨年の殿様お出迎え費用の折はなるほど粟屋家老が出向いたが、これは道中の序に寄ったまでのこと。前留守居・東東馬も国許では評定役兼帯のため、小口の銀談はすべて一存でその任に当たってきた、「これを考えてみるに、借銀の扱いに前例はなく、その都度適宜に、なされてきたといえる。今回、大坂留守居たる私が江村両人役の添え状持参で上坂したのであるから、決して粗略な扱いではあるまい」

しかも貸すのは藩にであり、幸い、領内の米紙とも大坂市場で最高値のつく産物であるから、店の不為になることはない、この時勢に前例にこだわるのは迂愚の沙汰である、と次郎彦は縷々とのべた。

芸者をからかいつつ、へえ、へえ、と片耳で聞いていた篤兵衛は、自分は丁稚以来かれこれ三十年の余も平野屋にあり、徳山のことは一手に任されてやってきたので、両人役がどのくらいの役職であるかはよく弁えているつもりだ、と、いよいよ責

任の所在に触れてきた。
次郎彦はゆっくりうなずいた。
「直往自無前」、いみじくも彦之進の評したように、奇策も妙案も浮かばぬまま、彼は小細工せず、率直に真実を訴えて篤兵衛を動かそうと決心していたのである。
「うん、当職の添え状でないから気に入らぬ、というのだな。だが、徳山ではこの春、行政を改革し、今は当職も評定役もおらぬ」
篤兵衛は聞くより苦笑をうかべた。
「へえ、おらぬといわはるのだすか」
「言うのではない、おらぬのだ」
「初耳だす、当職様がいはらんやなんて、そんな。責任者のお方がいはらんのだすか」
「責任者はいる。両人役五名じゃ」
「いや、わての申すのは、つまり……」
「わかっておる。それが両人役五名なのじゃ」
怪訝な顔の篤兵衛にむかって、次郎彦はさらに合議制なるものについて述べた。
其方のたった三十年の勤めでは知らぬのも道理であるが、両人役合議制の措置は徳山にあっては過去に何度かの例があり、元来、評定役や加判役などの重役職は近年にいたって設置された職ではあるが改廃随時、それが欠員の際は両人役合議で運営されると決まったものである。昨今、内外多事のゆえをもって行政を簡素化し、重役職を廃して代りに両人役の権限を拡大したのであって、
「江村どのは、会計局長を兼任されるいわばその方面の重役であり、其方店がいくら不服と申しても、今の徳山では江村どの以上の責任者は求められぬのだ」

しかし説けば説くほど、篤兵衛は納得しなかった。お扱いむきと添え状に終始してこの夜は刻がすぎ、では他の席もありますゆえ、お返事はいずれ、と、篤兵衛は土産を供にもたせて席を立っていった。

二人の姿が消えると、次郎彦にはとめどなく汗が噴いてきた。添削を仰ぐように谷城老人をみたが、袴の開きに手を入れた老人はなんとも評さない。やはり駄目か、言葉はなんと空しいものか、なにを説いてもそれが、すとっ、すとっと篤兵衛の分厚い懐に落ちていっただけの空虚な手応えを反芻していると、

「おそらく、何日待ちましても無しの礫、それよりは三日後に当方より追い討ちをかけてやり、その席でもあくまでの当職の添え状にこだわるようなれば、御用達さしひかえと出てやりましょう」

老人の呟くような過激な意見に、次郎彦はおどろいた。御用達さしひかえはあくまでも伝家の宝刀とは、着任の挨拶にいった宗藩蔵邸の留守居役から、くどく念を押されたものである。

「いやいや、宗藩蔵邸の連中が考えるほどの策は、この老人も知り抜いておりまする。定石もあって無きが如きもの、時もなし、それに銀高莫大とあって、少々の手段では篤兵衛は手の内をみせますまい」

「必要ならば一声かけてやってもよい、と宗藩の者はいったが、私はそれは好まぬ」

「さよう。他は頼むにたらず。宗藩といえども徳山の懐工合まではわからぬはず。児玉様、二人でこの話、立派に纏めてみせようではありませぬか」

それを聞いて次郎彦が安堵したように大盃を干すのをよそに、盃を伏せた老人はひっそり膳の上の鱧の身に箸をのばしながら、銀談というものは……と考えた。銀談というものは、哀訴強訴いずれでゆくにせよ、徒歩で、とつおいつ、ゆきつもどりつしながら相手の意中を探るものだが、次郎彦のはまるで馬に打ち跨がり旗指物おしたてて相手を蹴散らし突進する有様、といって初歩から教えるにひまもなし、人あしらいの巧みな東馬とちがって、この若者では押すより他の芸当は無理というものだろう……と、ひそかに吐息をもらしていた。

三日ののち。

篤兵衛の迷惑な表情にも構わず、またも根良く合議制について述べていた次郎彦がひょいと気付くと、いつのまにか話題は食味にそれていて、篤兵衛はむろんのこと谷城老人まで膝をのりだして名物のあれこれを数えたてている、淀の「食らわんか舟」にはじまってどこやらの鴨鍋……、上方者は食い物の話になると目の色変えてとめどもなくなるのであった。次郎彦は怒りに震えた。篤兵衛どの！　と、疳走った声で割って入り、時機をみて、と考えていた切り札を一気にさらけだしてしまった。

「わたしも国許では御用繁多の身じゃ。埒もない食い物の話などで時を浪費するつもりはない。もし篤兵衛どのがぜひに私では不満というのであれば、私もお役目相立たぬゆえ、別の思案をせねばならぬ。そうであれば、遠慮なく申されるがよいぞ」

御用達は平野屋ばかりではないぞとかけた謎をうけとめ、あんたはんの差し金でんな、とばかり篤兵衛はじろりと谷城老人を見た。老人は素知らぬ顔をして黒子にもどり、さてどう出るかと相手の心中を読んだ。

新米の留守居が駆けたり退いたりしながら話を煮つめてゆく呼吸を知らず、「右か左か、こりゃどうじゃ」と短兵急につめより、焦れて御用達さしかえをふりかざすのは大抵おなじ、彼には聞き馴れた念仏であろう。しかし、この巨きな若者は妙な迫力をもつだけにもし実際にこの若さで全権を委任されているならば、あるいは本気でさしかえの暴挙に出るやもしれぬ。その二つのもしもを篤兵衛はどう解すか。篤兵衛とて三万両もの旨い話を脇方へさらわれては、元も子もないはずである。

無意識に煙管を噛みつつ上眼で老人をみていた篤兵衛は、やがて次郎彦に問うた。

「さしかえのお話、ご本家も納得づくでおますのか」

「宗藩は関知せぬ。私の一存で申すのじゃ」

あ、そんなら、というふうに篤兵衛は供の男にむき、間接的にずばりと答えた。

「なあ、斉兵衛はん。徳山様にはこれまで頼まれればその都度、気ィ良う用立てしてきましたわなぁ。その二百年のお出入りが、どうや、この期に及んでえらい言われようやおまへんか。組合内にも話をかけてみんことには、三万両、右から左へお返事でけんのは当たり前だっしゃないか。それに、どないだすやろ、他とゆうても鴻池はんかて天野屋はんかて、軍備や朝廷用や幕府への上納金やとどこ様も借りだしに忙し今、おいそれと三万両都合しまっしゃろか。ましていちげんさんとなれば、

とても甘い事ではゆきまへんやろな」

存分にまくしたてて供からぴたっと次郎彦にもどした眼に、やれるもんならやってみなはれ、と恫喝の色がある。

おのれ、先刻からの傲慢無礼の態度に加えて、この雑言……と、次郎彦は目の前に火柱が立ったような気がした。

谷城老人は内心、首をかしげていた。なにか断定はできぬが篤兵衛の反応には、いつもと違う感触があった。

五

女将がご挨拶に参じます、との男衆の前触れがあってほどなく、葭戸の陰にまだ若い女将が手を突いた。それから篤兵衛にねんごろに挨拶すると、芸者たちが身をずらすなかを静かにあるいて、上座の次郎彦のそばに坐った

「徳山様のお座敷とききましたよって、もしか、児玉はんをご存知のお方やないかおもて、こうして参じましたんどっせ」

その京訛りに次郎彦は女将をみた。

髪も着物もわざとこうと（地味）に装っているが、そこには北野上七軒の「松菱」にいた小玉が、覚えてはりましか、と張りのある眼にやんちゃな色を浮かべて彼を眺めていた。

「おう、そちか」

「ほんまにお久しぶりどす。いつ、お越しやしたの。わてはあれからお父はん病気にならはって、間ぁなしにこっちへ帰りましたんどっせ」

傍目も憚らず懐しげに語る小玉に、奇遇のおどろきから醒めた次郎彦は、「積もる話はあとで」と手をふった。成行を察した小玉は笑いながら篤兵衛に着物の袖をみせて、

「折角こないにべべまで代えて飛びたつ思いで来ましたのに、素気のう追い払われました。きっとまた、旦はんがごちゃご

ちゃ苛めてはるよってでっしゃろ」
「こらまた、ふしぎなご縁だすな。とうからのお知り合いでっか」
「へぇ。児玉はんは見ての通り、裏も表もない真っ正直なお方だす。そやよって、あんまり苦労させんよに、わてからもお頼み申します」
「欺けまんな。そやけど、天松の女将はんとはまた、えらい伏兵が現れたもんや」
「そうだす。わてがついたからには旦はんも今迄みたいにゆきまへん、またいつものように、旦はんの宰領一つで決まることをお店がどやこやゆうて、渋ってはるんでっしゃろ」
「そんな、あんさん、内幕すっぱ抜かれては商売にならしまへんがな」
ふいに舞いこんだ美しい蝶のような小玉の華やかな笑顔と采配ぶりに、篤兵衛は口軽になり、木偶のようだった芸者は生気をとりもどし、固苦しかった座の空気はみるみる陽気に躁いできた。小玉はなおも冗談と本音を綯いまぜた煽てをつづけて、やおら身についたしぜんの媚びを発散させ、「なあ、旦はん」と柔らかく切りだした。
「わても京ではえろうごひいきになりましたさかい、徳山様のお座敷はみんなわてが持とおもてます。旦はんも天下の平野屋はんの大番頭はんだっしゃろ、ここは気張って、いるだけお使いやす、て、気ィ良うゆうてあげとくれやす。なあ、思いきって、ばんとゆきまひょ。さあ、お姐さん方も旦はんに、どんどん酌いだげとくれやす」
その声に、気位の高さで売る新地の芸者たちがいっせいに衣擦れの音をさせて篤兵衛に群がり寄った。花片に埋もれた恰好の篤兵衛は、人いきれと香料に真赤に上気し、小玉の黒い瞳にずるずる曳きずられるように、ついに汗塗れになって嗄れ声で喘いだ……「よろしま。ほな、わても思いきって」
芸者たちがいっせいに噺したてた。大坂人に女を添えるとこれほど軟化するものかと呆れかえっていた次郎彦も、たたみかけてたずねた。
「今年中に三万両。どうだ、篤兵衛どの」

「とても、とても、無理を承知で」
「うん」
「一万……と五千両」
この女将はまるで観音様だと成りゆきに注目していた谷城老人は、この瞬間、そばの次郎彦の体が宙に舞いあがるのを感じて、ぐいと次郎彦の袴裾をひいた。
「やっと、その気になってくれたか」
「なんやもう、逆上せてもて……ほんまに罠にはまったようなもんだすわ」
「忝ない。恩に着る。だがな、篤兵衛どの、一万五千両とは、ちと冗談がすぎるのではないか」
次郎彦の言葉に、篤兵衛も汗を拭きながら笑い紛らし、ここはひとまず撤退するにしかずと、住吉での席に廻っていった。
その夜「天松」に泊まった次郎彦は、小玉と差しむかいで積もる話をしながら、借銀について、得られるかぎりの裏の知識を得た。小玉は意外にも、銀談のもとも、駆け退きでなく、「実意」につきる、というのである。それは侍でいえば信義であろうか。篤兵衛は脂こい番頭仲間うちでは人柄のよい篤実な男だとも、小玉はいった。
また、松山藩などは三ヵ月も「天松」に十三家の御用達を招待しつづけ、ようやく十三家合力で千貫の借銀に漕ぎつけた、との内輪話をきけば次郎彦のこれまでの苦労など物の数でもなく、どんな城でも落ちない城はないと、新しい勇気も湧いた。
「ただな、児玉はん」
小玉は次郎彦をひたとみつめた。
「この店を切り廻さんならんよになって、わても覚えがおますけど、お金を借りる立場は、そら、弱いものどす。まして児玉はんはお武家はんや、古いお留守居の人かて、気ィふれはった人も刀抜かはったお人もいてはります。けど短気起こしたらおしまいどっせ、なんぼ口惜しうても辛抱して辛抱して、ほしたら、きっと安定ゆきますえ」
上坂以来はじめて聞く利勘と算盤をはなれた美しい声音だった。次郎彦は女の声とはこれほども心に沁みる美しいものだっ

たかと黙って小玉の顔をながめていた。

邸に帰った次郎彦は、別人のようにてきぱきとみずから次回の席を二十五日と決めた。谷城老人がすぐには退らず、黄ばんだ顔にうっすらと好奇心を煙らせているのに気付いたとき、彼の頭には明けやすい晩夏の夜の色と一人の女の消息をきくにはあまりに縋りつくようだった小玉の瞳とが横切ったが、今の彼にとってそれは遠い昔の出来事のようにしかおもえなかった。

その日の午前中に、銭屋を呼ぶ。

これまで、姉小路卿の暗殺（中山侍従とならんで攘夷派の双頭といわれた彼の死は、久坂や唯一たちが急ぎ上洛してきたほど影響が大きかった）を機として薩長不和となった状勢不安を口実に渋っていた老いた手代は、次郎彦が前任の東馬とちがって雑喉屋の方をひいきにしないと約束するのをきいて、他藩に廻す分を都合するから百貫といわず、二百貫借りてほしいとの姿勢を示した。これは、相場にして小判五十両に相当する。

午後からは雑喉屋とも面談。三百貫の申し入れに対し「今年中に百五十貫、残は来年中に」としぶるのを、翌日、その翌日と呼びつけ、ついに「二百貫を暮までに、残は来年一月でも二月でも出来次第に」と、下話をまとめた。

さて、二十五日。

呼吸のわかってきた次郎彦は、今日も篤兵衛が一万五千両に固執するなら、破談も辞さぬ覚悟である。三万両、なんとしてでも要るのである。出立前の彦之進の見積もりでは、六万五千石の産米の内訳として、二万八千石はご内証用に（これだけは動かせない）。二万五千石は禄米に、残る一万二千石に必要なら備蓄の三千石を放出してでも借銀利銀に充てる、という、いわば限界いっぱい担保にしての新借であった。軍備も行政も、政府が財政破綻から倒れるのは歴史の教えるところ、彦之進は新借の成るのを一日千秋の思いで待っているのであった。

「天松」に到着していた篤兵衛は、前二回と打って変わった神妙な態度で、「今日は、すっぱり胸の内を開いてお話しますよって」と膝を進めてきた。

「どうぞ、隠さんとお教えいただきたいのでございます」

「む。なんなりと」
答えながら、芸者の送る団扇の風がふっと暑苦しくなったように次郎彦は直感した。
はたして、前置き十分の廻りくどい話の末に東馬の名前が出てきた。東馬でないと、この何年にも亙る複雑な貸借の経緯がわからぬようになっている現在、今回の銀談は店として困惑している。東馬はいつ上坂するのだろうか、黙って帰国したままいつまで待ってもお上りではないが、というのであった。
肩をよせて聞いていた次郎彦はおもわず篤兵衛を見すえ、おもわず手にした盃を叩きつけていた。初めて一切が見えた、やはりこの男は東馬と組んで不正を働いていた、最初から東馬でないと交渉せぬ肚でいながら、この一ト月の間、お扱い向きの添え状のと尤もらしい口実を設けて彼を愚弄してきたのである。この姦商が……と彼は、かっと篤兵衛を睨んだ。彼の体内に久しく忘れていた動物的な憤怒が燃えあがり、滾って溢れた。これ以上東馬と組んで国許の士民をいたぶる心算なら、刺し違えてもそうはさせぬと、膳をはねとばした彼は、「よく聞け、篤兵衛」と大喝した。
「いくら其方が東馬を待とうと、東馬は二度と戻りはせぬ。東馬は帰国したのではないぞ、重罪人として召喚され、今は城下を放逐されて謹慎の身じゃ。東馬が其方店になにを約束し、其方と組んでどう私腹を肥やしたか、その糾明も私の役目、徹底的に調べあげてくれる。わかったか、篤兵衛！」
これまでの鬱屈のすべてを叩きこんだ大声であった。
芸者たちは怯えて片隅に寄っていた。
谷城老人の絶望的な眼差しがあった。
「天松」中が息をひそめて窺っていた。
その無気味な静寂のなかに「辛抱して辛抱して、なあ、児玉はん」、小玉の美しい声が微かに消えてゆき、次郎彦は坂に重石を押しあげるようなこの一と月の努力が一瞬に無に帰したのを知った。
篤兵衛の顔は歪んだ。そして、笑い顔になった。「だんない」と彼は皆を見廻した。次郎彦は老人を刺すように見た。「構わ

ぬ、気にせんでよいとゆうとります」、老人は小声で訳した。

背筋を伸ばして坐りなおした篤兵衛は、面を剥いだような厳しい顔付きで、

「今のお言葉で、よう解りました。じつはお疑い申して重々ご無礼でござりましたが、手前どもでは余のことはどうでもよろしく、東様と児玉様が一つ腹ではないかと、それだけがはなから気懸りでおりました」

と、打ちあけた。

平野屋側でも、東馬の不正―返済不履行の件、御用達数家から暫借を重ねた（これはもっとも恥ずべき行為であった）件、蓄妾、およびその親元への不正融資の件、廻洋丸の廃材と欠米（かけまい）で九百両着服の件まで、詳細に調べて、このうえまだ東馬が解任されぬなら、徳山の殿様の不為ゆえ、徳山へは融通打ち切りと店では決めていた。そこへ新借の話なのでこれはてっきり、不義理した東馬が姿を晦まし、代りに次郎彦を上坂させてまたもお店を欺くつもりと判断したのだ、と、「大坂の商人は実意を尊びます。これからはわても実意をもってお話にのりますよって、以後、かよう無駄なお振舞いはご無用に。お話は、お邸で十分でおます」。

解ってみれば、双方おなじ懸念をしていたのである。

次郎彦と篤兵衛はその夜はじめて芸者を遠退け、腹蔵なく話しあった。

翌朝、出仕してきた下役たちが次郎彦をとりかこんで、ふわふわ、ぺらぺらと、口々に言った。「よう話を纏められた、と見直しとります」、谷城老人が上機嫌で訳した。

篤兵衛が示した具体的な数字は、徳山藩の要求する七ヵ年賦三万両の申し入れに対し、五ヵ年賦二万五千両というものである。下役たちはそれを聞くと即座に、平野屋側も諸大名への貸し出しが烈しいいま、責めてみても事実、手元に持ち金がなく、これ以上の融通は無理であろう、また此方側としても、五ヵ年賦ならば単純に計算しても一ヵ年五千両の返済をせねばならず、それは藩の返済能力をこえる、との見通しを述べた。

「古借もおますし、東様は殿様お出迎え費用の返済を去年の十月から滞らせてはりますしな。そんなん加えたら、とても無

理だす」
「だめか。なんとしても三万金は無理か」
次郎彦は石の壁を押すように諦めわるく念を押したが、
「あきまへん！」
莨の煙のような大坂訛りが、この時ばかりは金鉄の重味をもってかえってきた。
彼らが算盤片手に弾きあげた結果によれば、三万両に固執するのは不得、しかも、平野屋へ二万金を、それも今年中に一万、残一万は明春三月まで、それで不足なら五千両は国許で用立てる（月八朱利としても御威光が利くから）という、予定より大巾に後退したものであった。
篤兵衛にその旨つたえると、晦日まで考えさせていただきたい、と保留した。それが、二十六日のことである。
一方、斉兵衛との金利引き下げ交渉からかえってきた谷城老人の顔をみただけで、次郎彦には結果が想像できた。弱小の藩ゆえの悲しさ、大藩のような低利長年賦にはとても応じず、しかも一般に貸し出しの烈しいいまは利率は上るばかり、八朱利を下げさせるのは至難の業なのである。老人は不満を隠さず、
「児玉様、あまり真ッ正直でもいけませぬ」
「と、申されると」
「今こそ、御用達さしかえの好機ではありませぬか」
篤兵衛めはあまりに店に対して押しが利かぬ、この条件ならどの御用達も悦んでうけるはずだ、と老人はいうのであった。
これが駆引きというものかと次郎彦は目を瞠ったが、この期に及んでのさしかえは過激だとおもった。では、と老人は、蔵邸の米と紙すべて国許へ取り下げ、来年秋の上納分から利銀を支払う契約にすれば、今年借りる一万両分は無利子となる、と複雑な操作の手口も進言したが、それも篤兵衛と交わした「実意」の約束の前には気がすすまなかった。
「致し方ありませぬ。では今から厳しく返事を催促いたしましょう。ここで手を弛めては、いつまで待っても返事はとれま

せぬ」と、老人はあくまで強気であった。

呼びつけられた篤兵衛は、

「ご一統様に伺って、あすはお約束通りかならずお返事を」

といい、先日、東様と一ッ腹ではないかとお疑い申したので、かよう情容赦もないご催促なのか、と老人にこぼした。彼が組合内で、今度のお留守居様は素人ゆえ、それは強うてと訴えたのを聞いた者もいて、さすがの篤兵衛も今度ばかりはほとほと困っているらしいと、蔵邸中が今は大詰めにきた交渉の行方を注目していた。

受けてくるか。逃げるか。

さすがに二十七日も夕刻になると、次郎彦は蔵邸で待つことに耐えられなかった。足はしぜんと「天松」に向いたが、その日はしきりと女子衆が小玉を呼び、出てゆくと小玉は長いあいだ戻らなかった。その夜も「天松」は満席、留守居と御用達のかけひきが酒と笑顔のなかで火花を散らしている。小玉の室にすわり絃歌のざわめきを遠く聞くうちに、彼はしだいに粛然とした気分になっていた。

この借銀を担当してはじめて数字の示す藩の貌をみた、藩は死に瀕しているもおなじ、六万五千石の百姓の汗の結晶が自由になるのはわずか五分の一たらず、しかもその大半が御用達の手中に落ちて、六千石相当の紙も、税も、すべて利銀の返済に充てられ、士民は何一つ潤うことがない。百姓も紙漉きも侍も切りつめるものとてもはや何物もない生活、これが人間の暮らしであるか。こんな仕組の世の中がいつまでも続いてよいはずはない。しかもその新しい世を招来するため彼はさらに二万五千金の負担を課そうとする。窮乏に喘ぐ彼らにあえて死ねというに等しい酷税を強いるのである。眼前の灯の輪の中に遠く小さく、贅沢という字も知らず、生涯「天松」での料理など見たこともなく、芸者の衣裳などふれたこともなく、ひたすら耕し仂き続ける国許の自分たちの姿をみつめ、彼はいつか大粒の涙をこぼしていた。

翌朝、篤兵衛は来た。

しきたり通り、はるか下座に平伏した彼はしきたり通り「なにとぞお慈悲をもちまして」と口を開いた。次郎彦は射竦める

ように注目した。

「当年中に銀八百貫目、来年七月に同断、かよう納め方ご猶予仰せつけられますれば、有難く存じ奉ります」

此方の要求通り、一万金づつ融通するというのである。

篤兵衛が頭をさげたとき、緊迫していた空気がどっと弛んだ。

返事は、追て、となる。長い不得手な戦いは終わった。篤兵衛が去っていったあとの空間は奇妙ひろびろとして、白襖には色もなく初秋の風が吹きかえしていた。

広間ではすでに急霰のような算盤の音がひびいている。新借の内から、御親兵費用三百両と殿様お出迎え費用の残を清算し、また東馬があちこちの御用達でしちらした暫借の不義理をも一掃するのであった。

「最後の詰めがまことに結構でありましたな」、谷城老人の自画自讃にわらいながら、次郎彦ははじめて巻紙をとり、書いた。

借銀成立を告げ、彦之進の一日も早い上坂を促したのち、「利勘の儀はまこと士太夫の能くする所にあらず、二万金にては面目も御座無く候えども、浅慮薄才、もはやこの上は力及ばず……」。

のち九月早々、彦之進が上坂して正式に約定したときには米、紙ともさらに急騰し、そのうえ幕府の銀相場への手入れもあり、金一両に対し九十三匁五分まで下っていた銀が七十九匁七分に反騰し、労せずして二百五十貫の利得となった。

藩はじまって以来の高額の借銀はこうして成功裡に終わった。

六

いつか八月十八日になっていた。前夜から淀川を溯った次郎彦は、伏見から三条へ、三条から鞍馬口へと、飛ぶ矢のように

まっすぐ暁の道をあるいていった。

現実の他の領域として朧ろ気なまま頭に刻んでいたその界隈、経師屋もある、豆腐屋も諸式屋もある。辻を折れ、ここだ、と立ちどまった。どこかで人声がする。ふつう京の町民はあんなに大きな声ではしゃべらないと気付くと、彼は一軒の軒下に身をよせ、斜め向かいにみえる格子戸をみつめた。声はしだいに近付き、いきなりその格子戸が開いた。

「おいはこいから忙しうなる。ちっとの間は来られもはん」

現れたのは堂々とした体躯のまだ若い薩摩侍で、勝手知ったように左へ折れ悠然と歩いて去った。

そのの姿は見えぬまま格子戸が閉まった。下駄音を忍ばせて露地をひきかえし、入口へと向かう気配である。勝手口から台所に続く板の間にあがって……と、そのの白い素足が目に浮かんだころになって、彼は真っ二つに胸を切り裂かれたような痛みを覚えていた。

歩きだした彼は格子戸の前をすぎるとき、露地の奥の建物へと笠の下の視線を投げずにはいられなかった。外界から隔絶され、蕩けるような憩いにみちていた小さな家。だが、その想いは彼一人のものであったか。脳裡にあるその顔は、白く無表情に、上洛の日に感じた京の町民の表情そのままに不可解な反応をみせてあくまで静かであった。暁の煙ったような露地には、そのが植えたのか、小さな赤ん坊の握り拳ほどの茄子の実がたれていた。遅い残りの花をつけた一本もある。次郎彦は、あれはもう実らぬだろうと動揺する目でその浅紫の花を可憐にながめた。

彼はもはや振り返らなかった。今はただ無性に、御親兵となって堺町御門を警衛している兄・安之丞のさわやかな笑顔に接したい、とおもった。河原町の藩邸には、姉小路卿暗殺以来、久坂や唯一もいる。元蕃も長府侯と交代のためほどなく上洛してくるはず、また去年のように一文字三ツ星の旗の下、都は長州の勢威にあふれ、そして、八月二十七日の大和行幸を機に、討幕はいよいよ実現の一歩をふみだすことになるであろう。

砲声が轟いた。

次郎彦は我にかえった。

戦や、戦や、と駆けてゆく者がある。
「おい、待て。いくさはどこだ」
「へえ。御所らしおす」
「ばかを申せ。御所で戦が起こるか」
そやけど昨夜から凝華洞にようけ軍勢が集まって、丸に十の字の旗もみえましたえ」
薩摩か。
だが、そんなはずはない。薩摩は姉小路卿暗殺の下手人をだした廉により、宮門守護の任をとかれて宮門出入り差し止めのはず。
それが、なぜ、御所のお花畑にいるのか。
そこまで考えた次郎彦の顔から血の気がひいた。姉小路卿暗殺をめぐり、「薩長漸く間隙あり」とされる現状である。
また砲声があがったとき、彼はもはや町民の言葉を疑わなかった。異変がおきたのだ。彼は白みはじめた烏丸通を一散に南へ走りだした。その二発の砲声が自分たち攘夷派への弔鐘ともしらず、彼は駆けに駆けた。
その日、御所は一夜にして会津と薩摩の占めるところとなっていた。のちにいう、堺町御門の変である。

（続次集）

あとがき　（秋原勝二）

国境　とは何か。黒川創著『国境』（完成版）がこの10月河出書房新社から出た。思わずその問いがでる。カバーにある大河は鴨緑江だ。朝鮮半島と満洲の国境安東（現丹東）を流れる。魚にも鳥にも人間以外の動物にも国境はない。あるのはテリトリー（縄ばり）、生存圏とも言えるか。温度・気候・食糧がそれをきめる。国境は人間のその縄ばり。生存権の線引きか。異文化の人びとが、せめぎあい、ひしめき、かなしみ、怒号し、おびえる場所。満洲はうめく。著者が20余年にわたり蒐集した貴重な記録。ここから何が生まれるか。発行した河出書房新社の重要な業績。

新美南吉　を同人渡辺利喜子がふれている。私の全く知らない人だが、私と同年、ひと月後の一九一三年七月に生まれ、一九四三年に三〇歳足らずで早世した童謡・童話の詩人であり作家だった人。その深いかなしみとは存在の儚さが。若くして良寛の生活に自分を重ねているが、体力のせいか早すぎる。そこに現代の国境は存在する余地すらない。

今集の寄稿者　詩はいつものように坂井信夫におねがいした。病中をかなえてくれた。樋口まち子は前集に続いての放射線の被災地福島県の人。前集は被災前の県南の寸景を書いて下さったが、今集は被災後の県南の小景をいただいた。

文楽の画家小田次男の旧稿『アカ』と既発表「シベリアの感傷」を読ませていただく。不思議な魅力にみちていてめずらしい。先日、平成三年刊の画集『文楽を描く小田次男』を拝受。入魂の文楽人形はいのちある如く、巻を閉じられず。

故同人吉田紗美子　の昭和六〇年度放送文学受賞作は残り一回で終了する。密度の濃いこの長篇を当誌に記録できるのはうれしい。

―2013年11月30日―

一党支配態勢の暗黒　その闇が軒端に足許に漾いはじめた。10人の賢人があれほど反対した「特定秘密保護法」が別の90人が選んだ多数党の強行採決で成立。よらしむべし、知らしむべからず、を目の当たりにした思い。この政権生かすなの声、耳を掠める。

『作文』第二〇六集正誤

P3下段3行　昭和三十一年　は
　　一九三一年
P27下段終行　きっと　は　キッと
〃29〃　12行　五階　は　七階
〃30〃　1・2行　新聞紙を　は
　　新聞紙と薄板を
P30下段11行　たが　は　だが
〃32〃　15行　邀撃隊　は　遊撃隊
〃33上段4行　中退　は　中隊
〃36〃　3行　五万円　は　五円
〃80中段17行　6回　は　5回

（作文同人）

名古屋　哲　夫　〒六〇三―八二二五　京都市北区紫野下門前町五

渡　辺　利喜子　〒一九〇―〇〇〇三　立川市栄町一―二五―九

秋　原　勝　二　〒二四九―〇〇〇二　逗子市山の根三―十一―二五　渡辺　方

次　集

第二〇八集

（平成二六年七月一日発行予定）

二〇九集から不定期刊に移行

作文第207集（頒価一、〇〇〇円）

発行日　二〇一四年一月一日

編　集
発行人　秋　原　勝　二

発行所（〒二四九―〇〇〇二）
逗子市山の根三―十一―二五　渡辺方
作　文　社
電話　〇四六―八七一―五七三一
振替口座
〇〇一九〇―9―六八九二五

印刷所（〒七〇三―八二三三）
岡山市中区高屋一一六―七
株式会社　三門印刷所
電話　〇八六―二七三―〇五五〇㈹